

文脈と構成性

— レカナティ『真理条件的語用論』を中心に —

高谷 遼平

本稿は、意味論と語用論の理論的境界に関する問題において有力であると考えられている文脈主義を議論対象とし、以下の二点を目標とする。第一に、文脈主義の内実を明らかにすること。そして第二に、文脈主義において最も急進的であると言われるレカナティの理論を批判的に考察すること。これらの目標を達成するため、まず 1 章では、発話文脈が文の真理条件的内容に対して持つ影響のうちモジュレーションと呼ばれるプロセスに着目し、文脈主義を二つの立場——穏健な文脈主義と急進的な文脈主義——に大別する。次に 2 章で、レカナティの理論における意味論的内容決定のプロセスを詳細に検討し、構成性という観点からその問題点を明らかにする。以上の議論を通して 3 章では、文の真理条件的内容についていかなる理論的位置付けが適切なのか示唆されることになる。

1. 四つの語用論的影響¹

言語哲学の伝統において、意味論と語用論は明確に区別されうるとされてきた。すなわち、意味論とは発話された文の真理条件的内容²が決定されるプロセスを、そして語用論はコミュニケーションの場においてその文がいかなる意味を伝達しうるのであるかを研究対象とする、という区別である。理論的境界に対するこのような伝統的見解に対応して、文の真理条件的内容は意味論的考察のみによって決定され、推意はその真理条件的内容をインプットとして発話文脈を考慮した語用論的考察によって決定されるという、意味の概念に関する明快な説明もまたなされてきた。しかしながら、意味論と語用論のインターフェースに関するこれらの見解は、発話、真理条件的内容、推意の関係性をあまりにも

単純化しすぎている．というのも，自然言語において意味論的考察のみによってはその真理条件的内容が決定されないような発話が多く存在するからである．例えば，

1. *She went to the bank.*

この文の真理条件的内容を得るためには，何が必要であろうか．まず，*She* によって指し示される対象が誰であるのかが特定されなければならない．いわゆる指標詞³を含む文においては，その表現の指示対象を特定するプロセス——指示付与——が必要である．さらに，(1)に現れる *bank* が銀行なのかそれとも土手のことなのか，発話された文のみからは判断がつかず，曖昧である．したがって，(1)の真理条件的内容を得るためには，*bank* という多義的な表現を一義化する作業——曖昧性除去——もまた必要であろう．指示付与と曖昧性除去は，意味論に対する発話文脈の侵入を顕著に表してはいるが，これらの作業を必要とする表現は，いわば文脈を考慮することが義務付けられた表現であり，指示付与と曖昧性除去は語用論のプロセスというよりむしろ前意味論的考察であるといわれていることに注意しなくてはならない．すなわち，これらのプロセスは意味論的考察の前段階で行われるプロセスであり，意味論的考察によって得られた文の真理条件的内容をインプットとして推意を引き出す語用論的考察とは異なると考えられているのだ．したがって，発話された文の真理条件的内容は，意味論的考察に加えて，指標詞に対する指示付与，多義的な表現に対する一義化(曖昧性除去)という三つの要素によって決定されることになる．以上をまとめると，真理条件的内容と推意はそれぞれ，

真理条件的内容：指示付与，曖昧性除去，意味論的考察

推意：文の真理条件的内容をインプットとした，語用論的考察

によって決定されるということになる．ここからは，このような図式をあらためて伝統的図式と呼ぶことにしよう．伝統的図式においては，文の表現する真理条件的内容は意味論のアウトプットでありながら語用論のインプットである

という二つの役割を担っており⁴、このもとでは、前意味論的考察という最小の範囲での文脈の侵入を認めてはいるが、意味論と語用論の理論的境界は真理条件的内容を境界にしてなお明確に区別されているといえる。

しかしながら近年、この伝統的図式のもとでも発話された文の真理条件的内容は得られないとする機運が盛んである。このような立場は一般に文脈主義と呼ばれるが、数ある文脈主義に共通するのは、「多義的な表現や指標詞を含まない文の真理条件的内容の決定において、語用論のプロセスが介在する」というものだ。例えば、

2. *Mary is ready.*

この文の真理条件的内容は文脈を考慮することなく決定されるだろうか。おそらく決定されないだろう。というのも、メアリーが何に対して準備が出来るのか、発話された文のみからは読み取れないからである。そして、*ready* は指標詞ではなく、多義的でもないため、*ready* は前意味論的考察では対処しきれない文脈鋭敏的 (*context sensitive*)⁵ な表現ということになる。文脈主義者は、自然言語において指標詞、多義的表現以外にも多くの表現が文脈鋭敏的な表現であると主張するのである。

では、指標詞以外の表現は、一体いかなる仕方で文脈に影響されるのか。本稿では、指示付与と曖昧性除去に加えて、文の真理条件的内容決定にあたって影響するとされている二つの語用論のプロセスを主に考察対象としていく。以下では特に断りがない限り文脈鋭敏的な表現ということで、指標詞と多義的な表現を除いた表現を指すこととする。レカナティやカーストーンなどによれば、発話された文の真理条件的内容を得るためには、飽和 (*saturation*) とモジュレーション (*modulation*) というさらなる二つの語用論的影響を認めなくてはならない⁶。まず飽和であるが、これは指示付与のプロセスと非常に似ている。すなわち、指示付与のプロセスが指標詞に限定されていたのに対して、飽和は、それら以外にも表現自体によって文脈が必要となるような表現が存在しており、そのような表現の意味論的内容を文脈によって決定するプロセスということになる。言い換えれば、自然言語にはその言語形式のレベルで変項が含まれてい

る表現が多く存在し、その変項を文脈に関する情報を頼りに埋める作業が飽和ということだ。例えば、

3. *Ken is tall.*

この文の真理条件的内容を決定するためには、ケンが誰と比べて背が高いのかということが特定される必要がある。この要素は(3)の発話自体には現れていないため、文脈を考慮することによって補わなければならないが、この作業を飽和が果たすと考えるのだ。つまり、*tall* という表現は、その意味論的内容を得るためには飽和のプロセスが必要であるような文脈鋭敏的な表現ということになる。もちろん、*tall* が実際に文脈鋭敏的かどうか、そして飽和によってその意味論的内容が決定されるのかという問題は語彙意味論的研究によって明かされるところではあるが、文脈主義者はこのようにして文脈の真理条件的内容に対する侵入を主張するのである。本稿では、飽和のみを認める立場を穏健な (moderate) 文脈主義と呼ぶこととするが、この立場の代表的な支持者としてキングやスタンリーが挙げられる。(Stanley (2000; 2002), King & Stanley (2005))

次に、モジュレーションについてみていく。飽和が指示付与のように表現自体によって要請される語用論的プロセスであったのに対し、モジュレーションはいわば純粋な文脈の影響、つまり表現自体の言語形式に制限されない語用論的考察が文の真理条件的内容に影響することを意味する。レカナティが用いている例をみてみよう。(Recanati (2004; 2010))

4. *The city is asleep.*

この文の真理条件的内容を得るためには、いかなる語用論的考察が必要であろうか。まず、(4)を字義通り解釈することが出来ないのは明らかだろう。というのも、そもそも街は眠くならないからである。さらに、*city* や *asleep* といった表現が(3)での *tall* のように言語形式のレベルで変項を含んでいると考えるのも難しい。しがたって、飽和のプロセスのみによっては(4)の真理条件的内

容を得ることが出来ないのである。この文の真理条件的内容を得るためには、*the city* をメトニミーとして読むか、*asleep* をメタファーとして読むなど、何らかの解釈の変更が必要であろう。この解釈の変更を可能にするのが、モジュレーションなのである。例えば(4)が発話された文脈が、*asleep* をメタファーとして読むことを顕著にするような文脈であるとしよう。このとき、*asleep* は表現自体の意味、つまり寝ているという意味ではなく、静かでほとんど活動がない、という意味に解釈されることになる。そしてこの解釈の変更は、*asleep* の通常解釈——寝ている——をインプットとしてとるようなある語用論的関数 g によって可能となるというのがレカナティの考えだ。レカナティによるこのようなプロジェクトは真理条件的語用論(以下、TCP)⁷と呼ばれるが、TCPにおける表現の意味論的内容決定のプロセスは後に詳しく考察する。さて、モジュレーションを認める文脈主義を本稿では急進的(radical)な文脈主義と名付けるが、レカナティの他にカーストンをはじめとする関連性理論者もまた急進的な文脈主義を支持する代表者であるといえるだろう。急進的な文脈主義においては、飽和という表現自体によって要請された文脈の影響はもちろんのこと、文の真理条件的内容に対して表現自体の言語形式に制限されない、より広範な文脈の侵入であるモジュレーションをも認めるのである⁸。

飽和とモジュレーションという、文の真理条件的内容に寄与する二つの語用論的プロセスを確認したが、文脈主義者みながこのいずれをも認めるというわけではない。むしろ、文脈主義をめぐる論争の主要な争点は、モジュレーションという純粋な語用論的影響を認めるのか否か、という点にある。ここで、穏健な文脈主義と急進的な文脈主義の立場をまとめておこう。

- 穏健な文脈主義：文の真理条件的内容は、指示付与と曖昧性除去という前意味論的考察、意味論的考察、そして飽和によって得られる。
- 急進的な文脈主義：文の真理条件的内容は、指示付与と曖昧性除去という前意味論的考察、意味論的考察、飽和に加えて、モジュレーションによって得られる。

モジュレーションも含めた広範な文脈の影響を主張する急進的な文脈主義は、

飽和のプロセスももちろん認めるため、穏健な文脈主義と常に対立するというわけではないが、両者はときとして同一の発話に対して異なる説明を与える。天気に関する文を用いてこの点をみていこう。

5. *It is raining.*

一般に、天気に関する文の真理条件的内容を決定するためには、その天気である場所、(5)の文でいえば雨が降っている場所が特定されなければならない。この文の中には雨が降っている場所が現れていないため、これを補うのは何らかの語用論的考察ということになる。まず、穏健な文脈主義からみていこう。スタンリー (Stanley (2000)) によれば、雨が降っている場所は、飽和によって(5)の真理条件的内容の一部となる。すなわち、*rain* という表現はただ雨が降っているということの意味するのではなく、その言語形式に場所の変項を含んでおり、文脈を考慮することでその変項が埋められる、と考えるのだ⁹。対して急進的な文脈主義者であるレカナティは、雨が降っている場所は飽和によってではなく、モジュレーションの一形態である自由補強によって(5)の真理条件的内容に加えられると考える。言い換えれば、*rain* という表現の言語形式には場所の変項は含まれていないということだ。このことを示すために、レカナティは以下のような文脈が存在すると主張している。

雨が極度に稀になり重要性が増した。降雨探知装置が領域(どんな領域でもいい——地球全体かもしれない)全体に配置されている。この想像上のシナリオではどの探知装置も雨を探知すればモニタールームの報知ベルを鳴らす仕組みになっている。ベルは一つだけだが、ベルを鳴らした探知装置の位置はモニタールームの掲示板に点くランプで示される。一滴の雨も降らないままに何週間かが過ぎた後、やっとベルが鳴る。これを聞いて隣室にいる当直の気象台員は *It's raining!* と叫ぶ。気象台員の発話は、(発話の時点で)どこかで雨が降っている場合に、そしてその場合にのみ真であるのだ。

(Recanati (2002), p. 317. 邦訳は、今井 (2006), p. 22.)

この例が示しているのは、天気についての発話において必ずしもその場所が特定される必要はない、ということである。レカナティが想定したこの文脈では、(5)が発話された時点で地球上のどこかで雨が降っていれば(5)は真となるため、真理条件的内容に場所は含まれないのである。もしスタンリーら穏健な文脈主義者が主張するように、*rain* がその言語形式に場所のための変項を含んでいるのなら、真理条件的内容を得るために必ずその変項は埋められなければならない。しかし、上記のような文脈では、その変項それ自体がそもそも必要とされておらず、飽和プロセスによっていかなる文脈でも(5)に雨が降っている場所を加えようとする穏健なアプローチは誤っている、そうレカナティは論じるのである。このような文脈では場所を加えず、雨が降っている場所が必要な通常の文脈では場所を加えるという柔軟な対応が出来るのは、純粋に語用論的なプロセス、つまりモジュレーションによってであるというわけだ。

以上で論じた天気の場合において、穏健な文脈主義と急進的な文脈主義のどちらが正しいのかを判断することは難しい。そして、両者は天気以外の様々な文に対してもその真理条件的内容に寄与する語用論のプロセスが飽和なのかモジュレーションなのかという点で対立しているが、決着は未だついていない。ただ、ここで一つの疑問が浮かび上がる。急進的な文脈主義は飽和に加えてモジュレーションも認めるため、より多くの文に対して直感的な真理条件的内容を与えることが出来るのは当然である。ではなぜ、穏健な文脈主義者はモジュレーションを拒否するのだろうか。次章では、穏健な文脈主義がモジュレーションを認めない動機、すなわち急進的な文脈主義に対していかなる批判を行なっているのか明らかにした後、急進的な文脈主義からの反論を検討していこう。

2. 文脈と構成性

本章では、TCPの意味論的内容産出のプロセスと構成性の両立可能性について批判的に検討する。そのために2.1では穏健な文脈主義、そして2.2でTCPの意味論的内容がいかに定義されるのかそれぞれ考察し、2.3でTCPが構成性に関して問題を抱えていることが明らかになる。

2.1 穏健な文脈主義

穏健な文脈主義者が文の真理条件的内容に寄与する語用論のプロセスとして飽和のみを認める動機を理解するために、まず穏健な文脈主義において文の真理条件的内容がいかに決定されるのかを精確に定義する。ここで穏健な文脈主義者として念頭に置くのは主にスタンリーであるため、まずは彼が自身の立場を表明している箇所を確認しておこう。

...all truth-conditional effects of extra-linguistic context can be traced to logical form.

(Stanley (2000), p. 391.)

...all the constituents of the propositions hearers would intuitively believe to be expressed by utterances are the result of assigning values to the elements of the sentence uttered, and combining them in accord with its structure.

(Stanley (2002), pp. 150-151.)

ここから、スタンリーが明確にモジュレーションを拒否していることがわかる。つまり、文の真理条件的内容に文脈が寄与するのは、その文に現れる表現の言語形式がその文脈を要請しているからであり、飽和によって常に真理条件的内容を得ることが出来ると彼は考えているのだ。また、ここでの「言語形式 (logical form)¹⁰」とは、表面的には現れない表現の真の構造であるとされるが、言い換えれば、実際の発話からは見て取れない隠された構造のことである。前章で飽和と指示付与について表現自体が文脈を要請しているという点での類似性を指摘したが、より精確に述べるならば、指示付与はカプランの意味特性から意味論的内容(カプランの意味内容)を得るために文脈が必要であり、対して飽和は言語形式から意味論的内容を得るために文脈が必要となる、というわけだ。したがって、飽和についても意味特性と意味内容の区別を応用するならば、穏健な文脈主義における単純表現の意味論的内容は以下のように定義出来る¹¹。

単純表現 α の意味論的内容 : $I_c(\alpha) = f(c)$

ここで、 $I_c(\alpha)$ とは単純表現 α の意味論的内容、 f は α の意味特性(言語形式)、 c は α が発話された文脈を表す¹²。すなわち、ある文脈における単純表現の意味論的内容とは、その表現の意味特性に文脈を項としてとることで得られるということになる。意味特性を用いて単純表現の意味論的内容をこのように定義したのならば、複雑表現の意味論的内容もそれに応じて定義出来る。

複雑表現 $\alpha^*\beta$ の意味論的内容 : $I_c(\alpha^*\beta) = f(I_{c1}(\alpha), I_{c2}(\beta))$ ¹³

ここで、 $*$ は単純表現 α, β の結合様式 (mode of combination) であり、 α の意味論的内容と β の意味論的内容を項としてとる関数 f によって複雑表現 $\alpha^*\beta$ の意味論的内容は決定されることになる。ある文脈における複雑表現の意味論的内容は、その表現に含まれる単純表現の(その文脈での)意味論的内容と構成規則によって決定されるのである。

以上のように表現の意味論的内容を定義出来たのならば、穏健な文脈主義が構成性を反映した理論であることがわかる。というのも、複雑表現の意味論的内容は、単純表現の意味論的内容と構成規則のみに依存しているからである。意味論における構成性の概念は通常、「複雑表現の意味は単純表現の意味と構成規則によって決定される」とされるが、カプランの意味特性と意味内容を指標詞以外の表現に対しても拡張する穏健な文脈主義は、意味論的内容のレベルで構成性を維持しているのだ。確かに単純表現の意味論的内容を決定する過程で文脈という要素は含まれるが、一旦単純表現の意味論的内容が得られたのならば、その意味論的内容と構成規則のみから複雑表現の意味論的内容を決定出来るのである。そしてまさにここに、穏健な文脈主義者がモジュレーションを認めない理由がある。飽和はあくまでも表現自体の言語形式、つまり意味特性によって要請されている範囲で文脈を必要としていたのに対し、急進的な文脈主義は言語形式に制限されない純粋な文脈の影響を認めているため、意味特性と意味内容のみによっては表現の意味論的内容を与えることが出来ず、それに応じて複雑表現の意味論的内容が単純表現の意味論的内容と構成規則によっては決定

されないのではないかと、そのように穏健な文脈主義者は主張するのである。すなわち、モジュレーションを認める急進的な文脈主義においては構成性を反映して理論を構築出来ない、ということが穏健な文脈主義の立場を取る動機なのだ。このような批判に対して、急進的な文脈主義者はどのような態度を取るべきなのか。次節では、レカナティの理論を考察することで急進的な文脈主義がこの問題にいかに対処するのかみていこう。

2.2 真理条件的語用論

意味論としての急進的な文脈主義と構成性の両立可能性という問題の解決を試みる時、二つの選択肢がある。すなわち、急進的な文脈主義はそもそも構成性を反映しない意味論であるとするのか、もしくは構成性と両立するよう意味論を改定するか、である。ただし、第一の選択肢を採ることは非常に難しいだろう。というのも、もし構成的な意味論を構築しないならば、言語の体系性や生産性といった我々の言語活動において不可欠な要素を説明出来なくなるからである。したがって、もし急進的な文脈主義を意味論として擁護するのならば、第二の選択肢、すなわち構成性と両立可能であることを示さなければならない。かくしてレカナティも、自らの理論である TCP における表現の意味論的内容産出のプロセスを提示することで、構成性を反映出来ると主張している。

TCP で表現がいかに関係されるのかを理解するためには、次の二つの関数が重要な役割を果たす。まず語用論的関数 g であるが、これは飽和プロセスによって得られた表現の通常解釈を項としてとり、モジュレートされた解釈、つまり、文脈的に顕著な / 関連する / 適切な解釈をその表現の意味論的内容としてアウトプットする関数である。語用論的関数 g によって、表現は飽和を超えた、つまり言語形式に制限されない意味論的内容を与えられることになる。しかしながら、語用論的関数 g とは、いかにして得られるのだろうか。意味特性は表現自体の意味として表現にいわば内蔵されているものであったのに対し、語用論的関数は表現自体をいくら吟味したところで得られるものではないのだ。そこで必要となるのが第二の関数、*mod* 関数である。*mod* 関数は、表現と文脈を項としてとり、特定の語用論的関数 g をアウトプットする関数である。つま

りこの *mod* 関数は、表現と文脈から、その文脈においてその表現がいかに関係されるべきかを示してくれるということだ。 *mod* 関数によって、表現の通常解釈がモジュレートされる必要がある場合には語用論的関数 *g* はモジュレートされた解釈を、そして通常解釈のままが良い場合には *g* は恒等関数としてその解釈をそのままアウトプットするのである。モジュレーションを説明するために用意されたこれら二つの関数を用いると、TCP における単純表現の意味論的内容は次のようになる。

単純表現 α の意味論的内容： $mod(\alpha, c)(I_c(\alpha)) = g(I_c(\alpha))$

ここで、 $I_c(\alpha)$ とは表現 α の飽和プロセス後の解釈、つまり、通常解釈 $f(c)$ を表す。すなわち、モジュレーションは常に飽和によって得られる通常解釈に対してなされるということである。では、この単純表現の意味論的内容決定のプロセスを実際の例を使ってみていこう。

4. *The city is asleep.*

この例は前章で用いた例であるが、(4) は字義通りには解釈出来ないということだった。というのも、街は眠たくなならないからである。(4) の真実条件的内容を得るためには、*the city* をメトニミーとして読むか、*asleep* をメタファーとして読むなど解釈の変更が必要なわけであるが、前章と同様に、(4) が *asleep* をメタファーとして読むのが顕著であるような文脈 *c* で発話されたとしよう。このとき、*asleep* の意味論的内容は以下のように導かれる。

$$mod(asleep, c)(I_c(asleep)) = g_{514}(ASLEEP) \\ = \text{QUIET AND SHOWING LITTLE ACTIVITY}$$

ここで、ASLEEP は文脈 *c* における表現 *asleep* の通常解釈、 g_{514} は表現 *asleep* と文脈 *c* を *mod* 関数の項としてとったときアウトプットされる特定の語用論的関数とする。こうして導かれた *asleep* のモジュレートされた解釈 QUIET AND

SHOWING LITTLE ACTIVITY が、*asleep* の意味論的内容として (4) の真理条件的内容に寄与するのである。さて、単純表現の意味論的内容がこのように定義されると、それに対応して複雑表現の通常解釈は次のようになるだろう。

$$\begin{aligned} \text{複雑表現 } \alpha^*\beta \text{ の通常解釈 : } I_c(\alpha^*\beta) &= f(\text{mod}(a, c_1)(I_{c_1}(\alpha)), \text{mod}(\beta, c_2)(I_{c_2}(\beta))) \\ &= f(g_1(I_{c_1}(\alpha)), g_2(I_{c_2}(\beta))) \end{aligned}$$

しかしながら、これはあくまでも $\alpha^*\beta$ の通常解釈であることに注意しなくてはならない。すなわち、 α と β のモジュレートされた解釈、そして構成規則のみからは、 $\alpha^*\beta$ の意味論的内容は決定されないのである。単純表現の意味論的内容がその通常解釈をモジュレートすることによって得られたのと同様に、複雑表現の意味論的内容を得るためにも、その通常解釈をさらにもモジュレートする必要があるのだ。したがって、複雑表現 $\alpha^*\beta$ の意味論的内容は次のようになる。

$$\text{複雑表現 } \alpha^*\beta \text{ の意味論的内容 : } \text{mod}(\alpha^*\beta, c)(I_c(\alpha^*\beta)) = g(I_c(\alpha^*\beta))$$

レカナティが、単純表現だけでなく複雑表現の意味論的内容も通常解釈をモジュレートしなければ得られないと考えたことには、ある理由がある。次の二つの文について考えてみよう。

- 6a. *They cut the cake.*
- 6b. *They cut the grass.*

サール (Searle (1980)) によれば、この二つの文に現れる *cut* の意味は異なっている。ケーキを切る際の *cut* と芝を刈る際の *cut* は、同様の表現でありながらも、二項述語の目的語の位置に何をとるのかによって、その意味論的内容もまた変化するというのだ。このような現象は意味論的柔軟性 (semantic flexibility) と呼ばれ、サールをはじめコーエン (Cohen (1986)) などによっても主張されている¹⁴。レカナティはこの意味論的柔軟性を、「表現の意味がその表現と結合する他

の表現の意味に依存すること」としており、複雑表現の意味が単純表現の意味に依存するのはもちろんのこと、単純表現同士の、もしくは複雑表現同士の関係がそれぞれの意味に影響することを示唆している。(6)の例でいえば、*cut* という表現は一項述語として(6a)では *the cake* の意味論的内容を、(6b)では *the grass* の意味論的内容を項にとり、前者は CUT WITH A CAKE KNIFE という意味論的内容を、後者は CUT WITH A LAWNMOWER という意味論的内容を持つことになる。もしこの意味論的柔軟性という現象が自然言語において存在するのならば、モジュレーションが複雑表現のレベルでも生じるとレカナティが考えるのも筋が通るだろう。というのも、単純表現のみがその解釈をモジュレートされるのならば、*cut* という表現の意味論的内容が項をとる前に決定してしまい、項によって意味論的内容が変わるとい意味論的柔軟性を説明出来なくなってしまうからである。*cut* の意味論的内容としての CUT, *the cake* と *the grass* の意味論的内容としての THE CAKE と THE GRASS, これらの意味論的内容から構成された *cut the cake* と *cut the grass* という複雑表現の通常解釈がモジュレートされることで、それぞれ CUT THE CAKE WITH A CAKE KNIFE と CUT THE GRASS WITH A LAWNMOWER という意味論的内容が得られるのである。

以上が TCP における表現の意味論的内容決定のプロセスである。穏健な文脈主義と同様にカプランの意味特性と意味内容によって表現の通常解釈を導き出すのに加え、語用論的関数 *g* と *mod* 関数によってその通常解釈を文脈的に顕著な / 関連する / 適切な解釈にモジュレートし、より直感的な真理条件的内容が得られるというわけだ。では、このように定義された TCP の意味論的内容は、構成性と両立しているといえるのだろうか。レカナティによれば、確かに伝統的構成性は TCP と両立しないが、文脈の概念を考慮した新たな構成性、語用論的構成性が成立しているという。この点を詳しくみていこう。伝統的構成性とは、複雑表現の意味が、その構成要素である単純表現の意味と構文論的構成規則によって決まる、というものだった。確かに、文脈という要素が伝統的構成性には現れないため、TCP が伝統的構成性を反映した理論であるとはいえない。しかしながら、たとえ文脈が表現の意味論的内容決定のプロセスに影響したとしても、それだけで構成性と両立不可能であることを示さないのは、穏健な文脈主義の意味論的内容を定義した際に指摘した。すなわち、意味論的内容決定

のプロセスに文脈が含まれていたとしても、複雑表現の意味論的内容の段階で文脈が影響しないのならば、構成性は保たれているのである。伝統的な構成性は、あくまでも複雑表現の意味論的内容に関する要求であり、単純表現がどのようにその意味論的内容を得るのかではないというわけだ。そしてまさにこの点が、TCP が伝統的構成性から袂を分かち点でもある。TCP における複雑表現の通常解釈は、その表現に含まれる単純表現のモジュレートされた解釈と構文論的構成規則によってのみ決定されるため、伝統的構成性を反映しているといえる一方、その意味論的内容は、通常解釈をさらにモジュレートする必要があるため、単純表現の意味論的内容と構文論的構成規則によって決定されないのである。したがって、TCP における新たな構成性概念——語用論的構成性——は、以下のように定義されることになる。

語用論的構成性： 複雑表現 e の意味(意味論的内容)は、その構成要素である単純表現 e_1, \dots, e_n の意味(意味論的内容)と構文論的構成規則によって決まった e の通常解釈に加え、その解釈をモジュレートする文脈によって決まる。

単純表現の意味論的内容から複雑表現の意味論的内容が導かれる全ての段階で文脈が影響を及ぼすため、語用論的構成性は伝統的構成性に比べ弱い概念ではあるが、レカナティはこの新たな構成性こそが TCP において成立しており、文脈を *mod* 関数の項として含んだ形で複雑表現の意味論的内容を導くのであれば構成性は維持されていると考えているのだ。しかしながら、この新たな構成性概念は、レカナティのいうように構成性概念として十全なものなのだろうか。

2.3 語用論的構成性

意味論的柔軟性を反映し、複雑表現の意味論的内容決定に際して単純表現の意味論的内容と構成規則に加え文脈の影響を認める語用論的構成性は、擁護しうる概念なのか。スタンリーら穏健な文脈主義者の構成性、つまり、単純表現の意味論的内容に関してのみ飽和による文脈依存性を認める構成性との違いは、

モジュレーションというプロセス、つまり *mod* 関数と語用論的関数 *g* にあるため、*mod* 関数と語用論的関数 *g* の妥当性に問題を絞って議論を進めよう。レカナティがこれら二つの関数をモジュレーションの説明として用意したのは、複雑表現の意味論的内容が単純表現の意味論的内容、構成規則、そして文脈によって決定されるというプロセスを関数的に捉えていることが理由であるが、構成性を関数として定義するのは構成性の要求をあまりにも単純化しすぎている。というのも、サボ (Szabó (2010)) も指摘しているように、たとえある領域から他の領域に対する関数が存在していたとしても、前者が後者を決定するとはいえないからである。したがって、もし *mod* 関数と語用論的関数 *g* がいかなるものであるのかそれらの内実がブラックボックスであるならば、たとえ語用論的構成性が関数として意味論的内容産出のプロセスを表しているとしても、構成性概念として認められることはないだろう。

まず、*mod* 関数と語用論的関数 *g* を確認しておこう。*mod* 関数とはある表現と文脈を項としてとり、特定の語用論的関数をアウトプットする関数であり、語用論的関数 *g* はある表現の通常解釈を項としてとり、意味論的内容をアウトプットする関数だった。*mod* 関数によって得られたある語用論的関数 *g* は、表現の通常解釈がモジュレートされる必要があるならばモジュレートされた内容を、その必要がないならば恒等関数として通常解釈をそのまま返すことになる。このことからわかるのは、表現の通常解釈と意味論的内容が、同じ領域——意味の領域——に含まれており、語用論的関数 *g* は意味から意味への関数ということである。したがって、表現の領域を *E*、文脈の領域を *C*、語用論的関数の領域を *G*、そして意味の領域を *M* とするならば、*mod* 関数と語用論的関数 *g* はそれぞれ以下ようになる。

$$mod: E \times C \rightarrow G$$

$$g: M \rightarrow M$$

ここで、一つの疑問が浮かび上がる。そもそも、なぜレカナティは語用論的作用を及ぼす関数として二つの関数を用意したのだろうか。ただモジュレーションという語用論的プロセスのみを認めたいのならば、語用論的関数 *g* のみでモ

ジュレートされた解釈が得られるようにも思える。この点に関してレカナティはほとんど議論を行っていないが、その理由を察するのはそれほど難しくはない。前述の通り、語用論的関数 g とは、ある文脈、ある表現における特定の関数であった。したがって、もしも mod 関数が存在することなく語用論的関数 g のみによってモジュレーションを果たすことが出来るならば、我々はある表現のある文脈における特定の語用論的関数 g を、いわば一つずつ知っていることになる。例えば、子どもが何らかの言語活動に基づいて表現 α 自体の意味(表現タイプの意味)を学んだとしよう。言い換えればその子どもは、カプランの意味特性と意味内容の区別に基づくならば、 α の意味特性を学んだということになる。そこで学んだ意味特性と文脈に関する知識から、その子どもは、 α が実際に発話された特定の文(文トークン)において、どのような意味論的内容(意味内容)を持つのか、導出するのである。すなわち、ある特定の表現の意味を知るとは、その表現についての特定の意味特性を知ることだ。同様に、もしも我々が語用論的関数 g のみによってモジュレートされた解釈を得ることが出来るならば、我々が表現の意味特性を一つずつ知っているように、ある表現とある文脈における特定の語用論的関数 g を知っているということになる。しかしながら、このような主張は到底受け入れられないであろう。我々は、特定の表現と特定の文脈に関する特定の関数を知識として持つことでモジュレートされた解釈を得るのではなく、様々な文脈にまたがる一般的な規則を用いることで意味論的内容を決定するのである。

上記のポイント、つまり、語用論的関数の局所性という問題は、 mod 関数を拮定することで解決するのだろうか。確かに、特定の語用論的関数をアウトプットする関数としての mod 関数は、一応の解決を与えることは出来る。すなわち、 mod 関数とは、特定の表現と特定の文脈に関する特定の関数を与えてくれる、一般的規則ということだ。我々は、その場限りでしか用いることの出来ない局所的規則の一つずつ知っているのではなく、その関数を導く一般的規則を知っているのだ。しかし、本当にそのような規則を我々は手にしているのだろうか。再び意味特性と意味内容の例を用いよう。子どもがある表現 α の意味を学ぶとは、 α の意味特性を学ぶということだった。その子どもは新たに学んだ α の意味特性を利用して、特定の文脈における α の意味論的内容を決定すること

が出来るようになるのだ。しかしながら、ここで子どもが学んだのは、意味特性を導くための一般的規則ではない。その子どもが成長する過程で学ぶのは、 α に関する局所的規則、つまり、 α の意味特性そのものである。あらゆる表現の意味特性を決定することが出来るような一般的関数なるものは存在せず、日々新たな表現についてその意味特性を一つずつ学んでいくのである。同様に、我々はモジュール化された解釈を導いてくれる一般的規則としての *mod* 関数を知ることは出来ないだろう。あらゆる文脈と表現において常にいかなるモジュール化が果たされるべきか示してくれる魔法は存在せず、発話のたびにその文脈におけるその場限りの局所的規則を適用するほかないのである。

mod 関数と語用論的関数 *g* に潜むこのジレンマは、これら二つの関数の関係を意味特性と意味内容という二つの概念と類比的に捉えていることに起因しているといえるかもしれない。確かに、語用論的関数 *g* と意味内容はともにある特定のその場限りの関数・内容であるが、一方で、意味特性もまたある表現に関する特定の規則であるのに対して *mod* 関数はあくまでもあらゆる場面に共通した一般的規則であり、意味特性・意味内容と *mod* 関数・語用論的関数 *g* の間に類比性は存在しないのである。もしも上記の論証が正しいのならば、TCP における意味論的内容決定のプロセスもまた正当化されることはない。*mod* 関数と語用論的関数 *g* に多くを負っている TCP は、これら二つの関数によって語用論的構成性という新たな構成性を主張した。しかしながら、たとえ語用論的構成性が表現の意味論的内容を、文脈を取り込んだ関数として示しているとしても、*mod* 関数と語用論的関数 *g* のいずれにも疑問符がついた今、TCP のフレームワークに対してモジュール化を含める形で構成性を反映した理論であるという評価を下すことは出来ないだろう。

3. 意味論と語用論

前章では、急進的な文脈主義の一つである TCP について、その問題点を指摘した。もしも TCP が急進的な文脈主義として妥当なものではないのだとしたら、文脈主義をめぐる論争は、穏健な文脈主義の勝利ということになるのだろうか。すなわち、たとえ我々が多くの表現について文脈鋭敏性を認めるとしても、文

脈の影響はあくまでも飽和プロセスに制限されるものなのだろうか。本章では、文の表現する真理条件的内容を得るといった目的において意味論と語用論が果たす役割を考察することで、意味論と語用論の境界問題について考えたい。

ウィルソンとスペルベルにはじまる関連性理論(以下、RT)は、関連性という概念を基盤にして発話において聞き手がいかに解釈を引き出すのかを解明しようとする、語用論的理論の一種である。RTでは、文の表現する真理条件的内容をグライスの伝統が反映された「言われていること (what is said)」と区別して「表意 (explicature)」と呼ぶが、表意を構成する要素はTCPにおける真理条件的内容のそれと類似している¹⁵。すなわち、表意は、指示付与と曖昧性除去、飽和に加え、モジュレーションという文脈の影響を受けて決定されるのである。したがって、文脈主義をめぐる論争においては、TCPと同様にRTも急進的な文脈主義と分類することが出来るだろう。現在RT論者の急先鋒であるカーストンも真理条件的内容に関する自らの立場についてレカナティとの類似性は認めているところだ¹⁶。では、前章での議論は、RTに対しての批判としても有効なものなのだろうか。おそらくそうはならない。というのも、たとえ文の真理条件的内容というものがRTとTCPで同様の内容であったとしても、真理条件的内容の理論的位置付けが異なるからである。レカナティは、TCPが新たな構成性概念である語用論的構成性を反映していると主張していた。このことが意味するのは、レカナティが真理条件的語用論(TCP)という名で真理条件的内容が語用論的に決定されることを示唆していたにも関わらず、なお真理条件的内容を意味論の延長に位置付けている、ということだ。真理条件的内容決定にあたって文脈に関する語用論的考察が多分に必要であるのは確かだが、真理条件的内容は、構成性という意味論に課された制約を満たす意味論的概念なのである。RTは、それに対して、構成性の制約を表意に課すことはしない。紙面の関係上本稿で詳しく議論する余裕はないが、表意は意味論的考察の影響を多分に受けた語用論的概念である。もちろん、表意に関してもその決定プロセスの妥当性を検討する必要があるだろう。しかし、本稿の論点である構成性という観点からみると、両者の真理条件的内容に与えるステータス、そして意味論と語用論のインターフェースは大きく異なっている。レカナティが意味論と語用論をある種の数直線上で捉え、グライスの伝統的図式に比べ真理条件的内容

を大きく語用論側にシフトすることで対応した一方、RT 論者はいわばその数直線自体を想定していない。確かに表意は意味論的考察の恩恵を受けはするが、意味論的制約のかかるものではないのだ。

文の真理条件的内容に関する位置付けが以上のように異なっているならば、構成性に関する批判は RT にとってそれほど問題ではないといえるだろう。そして、モジュレーションを認めたい論者は TCP の代わりに RT を擁護することを選べばいいのかもしれない。しかしながら、もし RT を急進的な文脈主義として主張するのならば、そこでは穏健な文脈主義との対立軸も異なるものになるだろう。文の表現する真理条件的内容がいかなるステータスを持っているのか、意味論はいかなるものをそのアウトプットとして持つのか、等々。たとえ TCP がその妥当性を失ったとしても、我々にはまだ多くの問題が残されているのだ。本稿の議論を糸口に、意味論と語用論の間を漂う様々な概念、そしてそれを扱う理論間の関係性解明を今後の課題としたい。

註

1. 本稿では文の真理条件的内容に寄与する文脈の影響を四つに分別したが、これは関連性理論における分別法と異なることに注意されたい。関連性理論では、指示付与と飽和は同一のプロセスであり、さらにモジュレーションの代わりに自由補強とアドホック概念構築という二つのプロセスが存在する。詳しくは Carston (2002) を参照。
2. 文の「真理条件的内容」と同じ意味で「表出命題」という術語もしばしば用いられ、いずれも真理値を持つ内容と考えられるが、本稿では「真理条件的内容」という術語を使用する。というのも、「命題」は真理値の担い手という意味の他にも信念や命題的態度の対象という意味など様々な用法が存在し、それらに関わる混乱を避けるためである。
3. 本稿では Kaplan (1989a) にならい、「私」、「いま」、「ここ」といった純粹指標詞と、「これ」、「それ」、「彼」などの直示語を合わせて指標詞と呼ぶ。
4. 伝統的図式における真理条件的内容は、グライスが言われていること概念に課した役割と同様の役割を果たす。グライスの言われていることと真理条件的内容の同一視についてグライス自身が明示的に論じているわけではないが、本稿の議論にとってこの同一視は無害であろう。両者を同一視する根拠について、詳しくは Neale (1992) や Carston (2008, 2009) を参照。また、言われていること概念の二重の役割についての問題点については、Korta (2013) などが詳しい。
5. 意味が文脈の影響を受ける表現はしばしば「文脈依存的 (context dependent)」な表現と呼ばれるが、文脈敏感的・文脈依存的の違いについて、Pagin (2005) で非常に明快な区別が設けられており、本稿でもそれに準ずる形で「文脈敏感的」という語を用いている。

- Pagin によれば、文脈によってその意味論の内容が変わる表現が文脈鋭敏的な表現であり、その意味論の内容が文脈依存的な内容である。すなわち、「文脈鋭敏的」とは表現自体に対して用いられるのに対し、「文脈依存的」とは意味論の内容に向けられた術語である。
6. 表現自体の意味に制限されない語用論のプロセスについて、本稿ではレカナティにならって「モジュレーション」という術語を用いている。本稿におけるモジュレーションとは表現自体の意味、意味特性、もしくは言語形式に制限されない語用論的影響のいわば総称であり、そこには緩叙法やメトニミー、メタファーや自由補強などによる意味の変更を含むものとする。
 7. 「真理条件的語用論」という名でレカナティだけでなくカーストン、バックによる理論を指すこともあるが、本稿ではあくまでもレカナティの理論として「真理条件的語用論」という術語を用いている。
 8. 穏健な文脈主義と急進的な文脈主義の区別に関して、本稿の区別法、つまりモジュレーションの是非という観点は、Cappelen & Lepore (2005) のそれ(文脈鋭敏的表現の数)とは異なっている。しかし、Borg (2007) も指摘しているようにモジュレーションの是非という観点のほうが、より本質的な区別法といえるだろう。
 9. もしも文に場所が明示的に現れているならば、文脈を考慮することなく *rain* の変項は埋められることになる。
 10. 本稿では、‘logical form’を論理形式ではなく言語形式と訳すこととする。これは、‘logical form’でスタンリーが意味しているのがラッセル的な論理形式とは異なるためである。
 11. この定式化は Recanati (2010) をもとにしているが、Unnsteinsson (2014) を参考に適宜修正を加えている。
 12. Kaplan (1989a) において意味特性は狭い文脈(世界、場所、時間、発話者)によって意味内容を決定するが、ここでの意味特性は文脈に話者の意図などを含む文脈を参照する、とする。そもそも、指標的・直示的表現の意味内容決定に際しても話者の意図などを考慮する必要があることは、Kaplan (1989b) でも示唆されている。
 13. α と β の意味論的内容をそれぞれ c_1 と c_2 という異なる文脈に相対化したのは、例えば “*It is cold here, but not here.*” という発話において、二つの *here* は異なる場所を示しており、異なる文脈で発話されたと考えられるからである。一つの発話においても異なる文脈を想定するのは、TCP における複雑表現の意味論的内容も同様である。
 14. もちろん、意味論的柔軟性を穏健な文脈主義の枠組みで説明すること、すなわち言語形式の変更によって解決することも可能だろう。しかしその場合、天気に関する発話の際と同様の論拠によって急進的な文脈主義者の反論を受けることになる。
 15. ここでは、主に Carston (2002) 以降の関連性理論を想定している。
 16. 関連性理論とレカナティの真理条件的語用論の類似性については、Carston (2002) など詳しく議論されている。また、相違点については Recanati (2004) を参照。

参考文献

- Borg, E. (2007). "Minimalism versus contextualism in semantics". In G. Preyer & G. Peter (Eds.), *Context-Sensitivity and Semantic Minimalism: New Essays on Semantics and Pragmatics*. Oxford: OUP. 546-571.
- Cappelen, H., & Lepore, E. (2005). *Insensitive Semantics: A Defense of Semantic Minimalism and Speech Act Pluralism*. Oxford: Blackwell.
- Carston, R. (2002). *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell. (西山佑司ほか訳. (2008). 『思考と発話——明示的伝達の語用論』 研究社)
- Carston, R. (2008). "Linguistic communication and the semantics/pragmatics distinction". *Synthese* 165 (3): 321-345.
- Carston, R. (2009). "The explicit/implicit distinction in pragmatics and the limits of explicit communication". *International Review of Pragmatics* 1 (1): 35-62.
- Cohen, J. (1986). "How is conceptual innovation possible?" *Erkenntnis* 25 (2): 211-238.
- Kaplan, D. (1989a). "Demonstratives". In J. Almog, J. Perry & H. Wettstein (Eds.), *Themes from Kaplan*. Oxford: OUP. 481-563.
- Kaplan, D. (1989b). "Afterthoughts". In J. Almog, J. Perry & H. Wettstein (Eds.), *Themes from Kaplan*. Oxford: OUP. 565-614.
- King, J., & Stanley, J. (2005). "Semantics, pragmatics, and the role of semantic content". In Z. Szabó (Ed.), *Semantics Versus Pragmatics*. Oxford: OUP. 111-164.
- Korta, K. (2013). "Grice's requirements on what is said". In C. Penco & F. Domaneschi (Eds.), *What is Said and What is Not: on Semantics/Pragmatics Interface*. Stanford: CSLI. 209-224.
- Neale, S. (1992). "Paul Grice and the Philosophy of Language". *Linguistics and Philosophy* 15 (5): 509-559.

- Pagin, P. (2005). “Compositionality and context”. In G. Preyer & G. Peter (Eds.), *Contextualism in philosophy : Knowledge, meaning and truth*. Oxford: OUP. 303-348.
- Recanati, F. (2002). “Unarticulated constituents”. *Linguistics and Philosophy* 25 (3): 299-345.
- Recanati, F. (2004). *Literal Meaning*. Cambridge: CUP. (今井邦彦訳. (2006). 『言葉の意味とは何か——字義主義からコンテクスト主義へ』 新曜社)
- Recanati, F. (2010). *Truth-Conditional Pragmatics*. Oxford: OUP.
- Recanati, F. (2012). “Contextualism: some varieties”. In K. Allan & K. Jaszczolt (Eds.), *Cambridge Handbook of Pragmatics*. Cambridge: CUP. 135-149.
- Szabó, Z. (2010). “The determination of content”. *Philosophical Studies* 148 (2): 253-272.
- Searle, J. (1980). “The background of meaning”. In J. Searle, F. Kiefer & M. Bierwisch (Eds.), *Speech act theory and pragmatics*. Dordrecht: Reidel. 221-232.
- Stanley, J. (2000). “Context and logical form”. *Linguistics and Philosophy* 23 (4): 391-434.
- Stanley, J. (2002). “Making it articulated”. *Mind and Language* 17 (1&2): 149-168.
- Unnsteinsson, E. G. (2014). “Compositionality and sandbag semantics”. *Synthese* 191 (14): 3329-3350.